

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	両筑修學旅行日記：雜録
Author(s)	笠間，益三
Citation	龍南會雜誌， 1 8： 1 5 - 2 2
Issue date	1893-06-27
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4088
Right	

然の數勢なり、掉すとは自然の數勢に乗するあり、夫れ天事人物固より大小緩急あり、徒に自然の流運に任せば迂回轉々遂に機失し事去るの悔なうらざらんや、是を以て物大小に従ひ事緩急に應じ、天下の數勢を達觀するの眼光と快刀亂麻を斷つの手腕とを以て直に自然の流運を捕へ鞭撻驅役駭々として歩武を進めば天下の事蓋し成ざるの理なけん、

内田遠湖曰、君臣父子夫婦、謂之三綱、世界難廣、人類難衆、所謂社會者、莫不由此而立、此篇獨遺之者何哉、

雜 錄

回顧すれば今や既に三星霜、明治二十四年十一月秋方きに高く馬方きに肥ゆるに當り吾校大舉して兵式旅行を福博の地に行ふや豪遊旬日鎮西北半の山野を跋渉し勇を養ひ智を磨き以て大に得る所ありこれ實に我長途行軍の嚆矢にして爾來此舉歲毎に盛を加へ以て今年に及べり然らば則ち福博行軍や實に我校の歴史上特筆して永へに忘るべからざるもの然るに當時未だ本會の設あらず従つて其日乗僅かに一家の私記として篋底に藏するあるのみ以て本校の歴史として後日の追憶に資するなし我齊常に以て憾みなす近る幸に我笠間先生の「修學旅行日記」を獲たり蓋し此行に於て本校殊に先生に屬するに旅行記事の任を以てせり故に先生の記一家私記の体に非らず自から善美なる本校の歴史なり我齊の喜何なか加へん乃ち先生に請ひ得て雜錄欄に掲げ以て諸士の劉覽に供す嚆矢に此の行にありしものは此を看て以て當時の快遊を追想すべく後の本校に來り遊ぶものは此を讀て我行軍の起源する所を審かにせよ以て宣くし我楢園先生に大謝すべしと云爾

兩筑修學旅行日記

教 授 笠 間 益 三

編 者 識

○六日。晴。午前七時を期し。職員生徒一同。學校に相集會せり。職員二十九人。生徒凡る一百六十人。

發程の準備既に整頓せしを以て。午前八時三十分。威儀肅々。喇叭の聲と共に校門を發す。留守椿幹事。出て、門外へ送せり。互に敬禮して別る。路を瀬戸坂に取り。京町に至り。出京町を出て、始めて熊本市と離る。川上村に至りて休憩す。此より後凡う一里にして休憩す其時間を凡う十分とす以下皆然り略して記せず又行くこと里餘にして。夜啼谷に至る。谷は路の右に在り。丁丑の役。官軍。賊の伏に陥る處とす。半里にして。路下りて復上るを。向ふ坂と曰ふ。坂を過ぎて。植木驛に至りて宿す。熊本を距ること殆ど三里。本部を分ちて二とぞ。生徒乃泊處を三箇に分てり。驛に達する。午後零時僅に十分なりしを以て。職員各生徒を從へ。一は驛を去る西一里餘に在る處の。丁丑の役劇戰場なる。田原阪に至れり。今や戰を去ること十餘年。其戰跡を認むること能はず。但崇勳碑あるを以て。僅に當時を想像するのみ。一は。驛の東北一里なる小野村に遊べり。村に小野小町の遺跡あり。其概略を記せん。村の東方に池あり。小町池と曰ふ。周圍二丁許。池の左右。奇石怪岩相羅列し。或は池中に突出て。嶋嶼の狀を成すあり。水太だ清冷。而して繞らすに楓及銀杏を以てし。紅黃相映じて。影を水中に倒にし。風景太だ佳なり。之をして城邑の傍に在らしめば。人復た蓋し水前寺を説かじ。其下邑偏地に在るを以て。人多く之を知らざるのみ。惜む可きかな。池の西に七國神社あり。其北に一小祠あり。小町を祀るものと云ふ。相携へて村長某氏を訪ふ。在らず。其妻引くに服部某を以てす。某。古記數件小野小町に属する者を携へ來れど。其一。安武某の記する所に係る。其略に曰く。平城天皇乃時。小野篁。罪を得て隱岐に流さる。其子良實。亦坐せられて肥後の國山本に配せらる。良實。父の絶海の孤嶋に謫せらるゝを悲み。西海七國七國は今其指す所を知らずを巡回して。七百神に禮拜す。以て父の罪を赦されんことを祈れり。既に畢して。山本に歸り。新に祠堂を建て、七國の神を祀れり。即ち小町池の西に在るもの是なり。後良實。夢に神の托宣を受く。曰く。汝に與ふる

に。一の美女を以てせんと。既にして。其妻身めるありて。女子を生めり。是を小町とす。長するに及んで。姿色艷麗。實に絶世の美人なり。其名遂に朝野に噪がし。良實。赦されて京師に歸るに及んで。諸公卿の家。争ふて納れて以て婦とせんと欲せし。然きども。小町遂に肯せずと云ふ。安武氏の祿する所。大略此の如し。此記の錄せる所に據るときは。此地は即ち小町の生るゝ所なり。故を以て池を稱するに其名を以てし。又祠を建てゝ以て之を祀りしならん。事頗る怪誕に似れども。姑く記して以て後の識者を待つのみ。嚮に村嫗の言に據り。村中に小町に係る古碑ありと聞く。乃ち服部某の誘引を請ひ。往きて之を觀る。之を村中古木陰森の間に得たり。碑高さ四尺餘。稍破裂し。蒼蘚相纏ひ。僅に梵字一二を認む。蓋し千年外の建つる者ならん。傳云ふ。小町。老後落魄して。諸道を巡行し。此地に至り。懷舊の情を起し。其父良實の爲めに之を建てたりと。其眞否を知る可からず。此日。小町池の西に在る所の古墳を搜れる者あり。云く。小町池の西數百歩にして。一小山あり。横山と曰ふ。其半腹は古墳あり。其外面。土を盛りて丘を爲し。其上。草木繁生し。尋常の山と異なるなま。其上古の墳たる以て證す可し。墳中に入るには。僅に身を容るゝの狹穴よりす。其内部の構造。極めて妙なり。全部石を以て之を造れり。狹穴より奥に至るまで。凡そ三間にして。其間に又一室あり。上は總て天然石を疊みて穹形とせり。其最も高き處は。凡そ一丈許にまで。一枚の平面石を以て之を蓋へり。蓋。千年以外の豪族の墳ならん歟。云云。午後五時。職員生徒。皆旅館に歸れり。職員環坐。小酌を謀るに及んで。村酒味太々。醗きに苦しむ。偶笹井教授。旋筐に美酒一瓶を携ふるあり。乃ち和きて而して酌む。一酔の後。互に押腕、曳枕の戯を爲す。以て旅況を遣る。既にして。寢に就く。一名ごとに。僅に蒲團一枚を給す。旅賃の賤なるを以てや亦宜なり。復た誰をか怨みん。此夜。霜氣頗る嚴なり。皆相倚り相藉りて臥せり。宛

も航海中。汽船下等客室に似たり。

○七日。晴。午前七時驛を發す。驛の中央。道岐きて二となる。左すれば。所謂田原坂に赴くもの。右を筑に通ずるの國道とす。乃ち右を取て行く。既に驛を出づれば。曉靄模糊として低く横はり。遠近の峯巒。之を貫きて聳ゆ。宛も群嶋の大湖に羅列するに似たり。亦佳觀たり。一里にして味取村に至る。此より田底村宮原村を経て。路脈北に轉ず。此處を山本山鹿二郡の分界とす。右顧すれば。群嶺起伏蜿蜒とて。數十里に綿亘す。其尤も秀つる者を。矢筈嶽震嶽等とす。千田村を経て。山鹿驛に入る。驛の南端。一水東より來り注ぐ者は。菊池川など。架するに一大橋を以てす。過きて而して皆旅亭を投ず。時に正午前七分とす。乃ち皆午飯す。此驛。人家一千餘煙。頗殷富なり。古より温泉を以て名あり。浴客遠近より來る者。四時常に絶えず。夏季を最も盛なりとす。實に驛戸終歲生計の源。多くは此より出づ。飯未だ畢はらず。砲聲隱々として驛の北方に聞ゆ。是より先き。第六師團對抗演習を肥筑の野に行ふ。且つ戦ひ且つ南し。而して其戦局今や此地に及へるなり。蓋し我校の此行。亦之を觀んと欲するの意あり。然れども其初。未だ果えて善く之と路に相會するや否やを知ること能はざりし。而して今此の如き。生徒皆大に喜び。勇氣之が爲めに勃々たり。午後三時三十分。驛を發す。驛の北端に。孝子孫次郎の碑あり。孫次郎は。驛中の民なり。其姓を知らず。孫次郎。鍛冶を業とす。家甚だ貧にして。老母あり。孫次郎奉事甚だ至れり。寒候に至る毎に。母の衾の薄きを悲み。夜は母に合せ被らしむるに。已の衾を以てし母の熟眠するを待ち。竊に走りて驛中の温泉に投じ。自ら温を取り。以て天明に至り。始めて家に歸り。母の安否を省る。又春和冬暖の候に當りては。母時として驛傍某寺に賽せんと欲す。老ひて歩すること能はず。孫次郎時に年五十餘。輒ち自ら母を負ひ。行々情話歎談し。以て母を慰め。

以て常とす。其他刻思苦行至らざるなき。藩主細川侯。之を聞き。年に米若干苞を賜ひ。以て夫に其孝を旌はせり。孫次郎と安永天明間の人と云ふ。嗚呼。孫次郎は賤民なり。然れども。是を以て芳躰を金石に刻み。以て無窮に垂る。忠孝の已む可からざる。其を此の如し。此より西北を指して行く。半里にして水あり。鍋田川と曰ふ。一大眼鏡橋之に架せり。過ぎて而して路、山谷の間に入る。人家五六十。林樾丘陵の間に散在するを。鍋田村と曰ふ。乃ち此に宿す。村は驛亭より非らず。而して此に宿するものは。明曉を以て。師團の戦鬪を觀んと欲すればなり。職員一同。高木某等の三戸に分れ宿し。生徒は六戸に分れ宿せり。嚮きの砲聲復た大に起り。日暮に至りて未だ已まず。聞く師團の兵分れて東西二軍と爲せりと。今の砲聲は。蓋し東軍。夜に向て勢を張り。威を西軍に示せし者歟。此日。午後に至り曇暖。一行皆明日の雨を恐れて蓐に就けり。

○八日。起きて窓戸を推せば殘月天に在り。覺へず快と呼ぶ。蓐食。旅館を發し。鍋田橋に至れば。天未だ明けず。而して師團の戦。方に始まをり。東西兩軍。皆山に倚り。丘を食ひて陣し。銃砲、曉霧を破りて轟發し。聲、山嶽に震ふ。觀極めて壯快なり。此の如きこと。三十分許。西軍は。彦岳の麓を以て根據とし。而して東軍は。之を距る南一里の丘陵に倚りて。本營を置きたるものに似たり。已にきて。休戦を令するの喇叭忽ち起り。銃砲の聲悉く収まれど。蓋し勝敗已に決せざるを以てなり。此間。我一行は。校旗を樹て、以て標とし。隴畝の間に屯集して。之を觀る。觀終りて乃ち發す。午前九時。津留川に至る。鍋田川の上流なり。橋あり池田橋と曰ふ。橋を過ぎて憩ふ。此近傍。山腹、及村家籬落の間。處々、兵卒の休憩するを見る。數里廣見村に至りて憩ふ。村を出づる二三丁にして。道原橋を渡る。此より以北。路常に水に沿ふ。此水や。即ち鍋田川、津留川の上流にして。源を菊池郡の多久山中に發するも

の。一里にして曲淵橋に至る。橋下水流回曲して淵を成す。橋の名ある所以なり。此より路脈歩々高き
に就く。而して始め水と別れて。兩山相逼るの際に入る。山質大抵岩石を以て成る。矢津助教授。指
して生徒に示して曰く。此山や。一帯の山脈。甚だ古し。蓋は始原紀層。或は太古紀層の間に在らんと。
岩野村を経て。山中嶺に至る。肥筑分界の標木あり。標木を夾みて。茶店八九を設く。乃ち憩ふて午飯
す。偶々武官某氏に遇ふ。今曉の戦に臨みし人なり。因りて勝敗何如を問ふ。對て曰く。今朝の戦。兩
軍共に戰略を誤てり。前夜々半。共に深く戦線の度を進め。東軍は東山に傍ふて北し。西軍は西嶽の下
を過ぎて南し。互の先鋒は。殆ど背に敵を見るに至れり。蓋し暗を衝て進行するを以てなす。天明。戦
を開くに及て。始て之を知り。皆其意外に出づるを以て。遂に勝敗を決すること能はずして。戦を休
すと。後又軍人に聞く。今曉の戦。東軍大勝利を得たりと。其れ或は然らん。蓋し嶺上の武官某は。蓋し
西軍に属せしもの。故に我軍の敗を諱みし歟。路復た兩山の際に入るを。邊春谷と曰ふ。此地。茶を産
するを以て名あり。二里よして。永瀬村に至りて憩ふ。山間の小水滴々として下る。是を邊春川の源と
す。此より漸く川を成き。又二里にまで遙に兼松驛を見る。驛に入るの右端に急湍あり。即ち邊春川の
末流にして。矢部川と合する處たり。兼松驛に宿す。此日行程稍遠きを以て。皆頗る疲勞を覺ふ。秋月
教授。年始と七旬。而して健歩壯者と相伍し。嘗て勞を告げず。一行皆驚歎せざるなし。此夜。本部を
一亭に合し。生徒と之を六舎に分宿せしめたり。熊本を出てより。職員皆相合併きて宿するは。此を
始めとす。會飲以て勞を慰す。

○九日。午前六時。驛を發す。秋雨霏微とて下る。生徒皆雨衣を着けて發す。驛を出て、北半里よし
て。水あり。是を矢部川とす。川此に至りて岐きて三派となる。故に橋を設くる亦三處なり。蓋し春夏

れ候。水溢るゝときは。三派合えて一となる。今や秋水已は落つ。故に此の如し。下ること半里ならずして。復合えて一と爲ると云ふ。一里にして福島驛に至りて。天明く。上妻郡役所の在る處たり。此驛。南筑東部の産物を集むる要衝の地にして。既に此に集め。而して後。以て西、若津港に輸送す。故を以て商業頗る繁盛なり。此より以北。檀田頗る多し。葉々霜に飽き。紅方に潮するの候なり。既にして。路、岡阜丘陵の際に入る。行くこと三里許にして。始めて久留米市に達す。市、戸數一萬五千。頗る繁盛にまて。筑後第一の都會とす。織物。即ち久留米飛白を出だまを以て名あり。市の近傍。村落に至るまで。婦の機工に従事せざるもの鮮く。軋々の聲常に路を夾めり。久留米中學明善校に至る。校長後藤謙。各職員と共に我が行を迎へ。待遇頗る至れり。一室を假りて午飯を。此日。日曜に属するを以て。其授業を參觀するを得す。洵に遺憾なりとす。正午。校を辭し。鐵道停車場に至りて。以て車の至るを待つ。此日。久留米に至るの途次。路を枉々て吉田村に至る。一高丘あり。石神山と稱す。蓋し古代の一大墳丘ならん。後世此の山より。許多の石人形を堀り出すことありしに因て。此名ありと云ふ。其石人形は。古の所謂埴輪の類ならん歟。筑後風土記に據まば。古昔筑紫の國造磐井。奢侈を極め。其生前。豫め墳墓を築き。六十の石人を造り。其周圍に立てたりと云ふ。然らば則ち此墳丘。或は磐井の作に係るものあらん。或は云ふ。此村の西北に。一條村と稱する處に。磐井の墓ありと。而して此地方を總稱して。人形原と曰ふ。處々より人形を堀り出すを以てなり。石神山より堀り出したる石人等は。往時。福島城を築くに當り。其材料に充てた。其城趾。今猶は福島驛の傍に在りと云ふ。然れども。事固より久遠に属するを以て。之を確徴するに由なきのみ。須臾にして氣車博多より至る。乃ち皆之に上る。汽笛一聲。機關運轉を始め。車、北に向て馳す。實に一瞬千里の想あり。忽ち一大水の東より來るに逢

ふを。筑後河とす。鐵橋之に架す。橋を過くれば地、西肥に入る。一里にして停車場あるを。鳥巢と曰ふ。又一里餘にして。田代停車場に至る。走ること半里許にして。右傍、山に沿ふて碑あり。記して曰く。自此東筑前國と。原田停車場を過ぎ。一望平濶の地に出づ。峯巒巍々。高く右に秀つるを。寶満山とす。太宰府は。其麓に在り。歸路の觀に属す。山脈平遠にして。左方に在りて。孤松其巔に立つは。天拜山なり。時に雨瀟々として下り。雲霧冥濛。故に一々之を詳にすること能はず。道を夾む名所舊跡の位置。即ち萱關の古址。水城の遺狀等。皆大略生徒に指示して過く。是より。二日市、雜餉隈の二停車場を過ぎ。久留米を距ること。凡そ二十二哩にして。博多停車場に達し。車を下る。時に午後一時五十分。至るは則ち。先發者志水余田二氏。迎へて此に在り。相遇て互に勞を慰す。時に元寇紀念碑。建設委員何某等。來りて我一行に請ふに。將に元寇紀念碑を建てんとするの處を觀んことを以てす。乃ち泥を衝き。至り觀る。其位置博多東公園中に在り。碑の基礎。未だ建てず。其竣功に至るまで。今より幾星霜を閱するや。未だ知る可からず。委員。請ふて我生徒を整列せしめ。寫眞師をして。之を撮影せしめたり。畢て其西方。皆松館の園中に延き。茶菓の供あり。且つ弘安の役に係る古器物古文書を觀せしむ。黄昏。一同去りて福岡の旅館に就けり此夜。雨晴る。

吾妻山噴口探檢日誌

在理科大學

值賀威一 郎
佐藤傳藏

單ニ地質學ト稱スレバ其區域甚ダ狹少ナルガ如キモ化學ニ無機有機ノ區別アリ物理學ニ光學熱學電氣學等ノ區分アル如ク地質學ニモ亦種々ノ區分アルヲ免レザルナリ曰ク地質力學曰ク地質史學曰ク地質構造學曰ク應用地質學是也而シテ此中余輩ノ最モ興味ヲ感ズルハ則チ地質力學ナリトス